

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年10月30日)

授業者：〇〇

範囲：国際経済

主な感想・代案

- 端的に言って、授業者が、この範囲をなぜ教えないといけないと思っているのかが分かりませんでした。象徴的な事例としては、「目標検証シート」の3「自由貿易を行う利点は？」4「円高・ドル安の状況で日本が貿易を行うと？」といういずれの質問も、教科書を丸写しにしたような解答だけで書いてしまい、生徒が頭を使う場面がないと思うからです。これは評価基準が知識理解か思考判断かといった以前の話としてです。
- 例えば、多くの生徒にとって、自由貿易と保護貿易の関係なんて理解しなくて困らないのではないかと為替のことだって、新聞でチェックする人が世の中にどれだけいるのでしょうか？そういった質問に対して、誠実に答えられるかをもう一度問い直してほしいなと思います。そして、生徒が確かに「知りたい」「知る意味がありそうだ」と思えそうな導入ないし展開にしてほしい。
- 私であれば、導入で、アメリカと中国の貿易規制の激化がしていることを示した新聞を持ってきます。そのうえで、その概略を図やニュース動画で説明した後、「これって私たちにとって重要な問題だと思う？」と聞いてみます（むしろ重要だと思わないという生徒の意見が欲しいです。その理由が後につながるからです）。そのうえで、自分が仮にアメリカ人だとどう困るのか？日本人ではどう困るのか？について、資料を基にして考えさせます。その議論を通して、比較優位の理論が結果としてわかってくるのが理想です。後半の為替に関しては、最近騒がれているFacebookの「リブラ」の話を紹介します。なぜ、世界各国がリブラの登場を恐れているのか。その点について議論することで、為替の仕組みが説明できると思うからです。

【コラム】理論と実践の接点

先ほど、「この範囲をなぜ教えないといけないと思っているのか」という話をしました。これに関して、最近の社会科教育の研究や実践では、「エイム・エイム (aim talk)」という、社会科としての授業の狙いについての議論が重要である点がよく指摘されています。狙いに関する議論は、指導技術や授業構成をどう直すのかという話から行くと少し遠回りのようにも見えますが、そのそも、ここで何を教えないといけないのか？という話を進めるうえで、「なぜこれを教えないといけないのか？」という問いに繋がりがやすいので、結果的に授業づくりをシンプルにできる長所があります。■参考文献1

同じく、授業の内容が知識の詰め込みにならなすぎないようにするためには、その授業でこれだけは教えたいという「重要な観念(Big Idea)」を意識することが重要であると、近年の研究では強調されています。ここでいう「観念」というのは、「〇〇は～～である」といった一連の文章で書かれる点が特徴的で、生徒は要するにこれが言えるようにならないといけない、という内容を授業者自身が示すことが求められます。同時に、この重要な観念は他の人が見ても考え出すと深い内容だと思えるような、内容的な濃さが必要だと言われています。そういった知的で濃い内容を授業者自身が念頭に置けない段階で、授業をするのは教材研究不足なのかもしれません。 ■参考文献2

【参考文献1：2冊】スティーブン・J・ソントン『教師のゲートキーピング—主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』 渡部 竜也『Doing History：歴史で私たちは何ができるか？』

【参考文献2】グラント ウィギンズ, ジェイ マクタイ『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』